
孤独な少年VSドラえもんズ

及村翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な少年×Sドラえもんズ

【Zコード】

N1925D

【作者名】

及村翔

【あらすじ】

敵は友情を憎む孤独な少年！始まるロボットの暴動！のび太、静香、スネ夫、ジャイアンも参戦！不滅の友情に亀裂が入る！？ドラえもんズは敵を倒せるか！？

第一話 デラーパワとの出会い、未来の事件（前書き）

擬人化 + オリジナルキャラが出ます。

苦手な方は閲覧注意。

第一話 ドラえもんとの出会い、未来の事件

前書き

この話ではドラえもんズが擬人化致します。
許せない方は見ない方がいいです。

時は22世紀

ロボット達は全て人型に改良される計画が行われた。

ドラえもんズもそれは例外ではなかつた

計画が終了した後

ある一人の少年科学者が姿をくらませた

彼は友情を憎み、信頼を嫌う者だつた

彼は

不滅の友情を持つドラえもんズが憎らしかつた

彼の心に秘められた思いは

彼等ドラえもんズの友情を壊し

彼等を“壊して”しまおう…

だつた

桜の花が舞い散る季節

野比のび太は無事高校生になった。

ジャイアン、スネ夫、静香も同じ学校だ。

今日は、久しぶりにのび太の家で遊ぶ事になり、のび太は一足先に
家に帰つていた。

「ただいま！」

両親は親類の結婚式やらで3日は帰つてこない。今家にいるのは小
学校5年生の時からお世話になつてゐる猫型…いや、現在は人型ロ
ボットのドラえもんだけだつた。

階段を上がり、自分の部屋の扉をあける。

「あ、おかえりのび太くん」

部屋にいたのはやはりドラえもん。

青髪のショートヘアで黒い瞳、青と白のパーカーに水色のズボンを履いている彼はいつものように壁に寄りかかって漫画を読んでいた。

「今日、静香ちゃん達が来るんだ」

「そ、うなんだ。久しぶりだね」

ドラえもんと呑氣な話をしているとふいに机の引き出しが開き、中から人が出て来た。

出て来たのは茶髪に真っ白な肌の細身の青年だつた。

耳の下あたりのショートヘアで紅い瞳、服装は春なのにも関わらずマフラーをしていて暖かそうな服を着ている。

「アーティスト」

ドラえもんが嬉しそうに顔を向ける。
どうやら知り合いらしく。

「…………はじめまして。僕、デーラー、」「…………デーラーもんとは親友…………よろしく……」

のび太より15cm以上高いドリームは恥ずかしそうにマフラーで口元を隠しながら右手を差し出す。

のび太は戸惑いながらも右手を出し握手する。

「でも、どうしたの? ドラ一コツが来るなんて」

ドリエもんは不思議そつにドラ一コツをみやる。

ドラ一コツが口を開けたとした時にインター ホンがなる。

「あ、静香ちゃん達だ」

のび太が玄関にむかい、静香達を部屋に招き入れる。

静香達は驚いていた。

無理もない

部屋にいるのはドリエもんの他、整った顔立ちをした白人の青年がいるのだから。

「みんな、彼はドリエもんの親友でドラ一コツって言つんだよ」

「はじめまして……ドリエもんとは同じロボット学校に通つてたんだ……今は……ロシアで人助けとか……ハリウッドで映画俳優やってる

……」

静香はやや顔を赤くしていたようだ。

映画俳優だかルックスがよく、声もとても澄んでいるのだから。

のび太は少し面白くなかった。

「ああ！僕知ってる！」

スネ夫が急に大声を出す。

「あの有名なスーパー・ウルフマン・シリーズで主演してる有名俳優だよー。」

「ああ、ドラゴンは僕と同じ時代で映画の仕事をしてるからね」

ドラえもんが納得したように囁つ。

ジャイアンは

「そんな有名人と知り合いなんですねーな」とドラえもんを見ている。

「あ、そつそう。なんで来たんだっけ？」

ドラえもんがドラー口づに再び向き直る。

「……大変な事があつたんだ…」

ドラー口づは少しつつ向いて話す。

「僕等を人型にした科学者の一人が行方不明になつた。…そして、ロボットが暴動を始めたんだ」

第一話 同行願い（前書き）

擬人化、オリジナルキャラあります。

第一話 同行願い

「 「 「ロボットの暴動! ?」」

「うん。22世紀では、ロボット達が様々な暴動を起こしてて、僕等を狙ってるんだ」

驚く4人にドラー・コフが説明する。

「他のみんなは平氣なの?」

心配そうに口を開くアーヴィング

「みんなは、22世紀にいなかつたから、影響はないみたい」

「よかつた……」

安心したように座りこむドラえもん

「『みんな』って？」

不思議そうにスネ夫が尋ねる。

「僕の親友だよ。僕とドーラー口づを入れた7人で、僕等はドラえもんズつて言われてるんだ。不滅の友情を誓い、7人でいろんな事件を解決したんだ」

「まあ……8割りは校長先生に騙されたよね……」

白漫氣に話すドーラえもんに対し、ドーラー口づはやや遠い目だ。

「その7人は、ドラちゃんと学校の頃からの知り合いなの？」

静香がやつ尋ねるとドリームもんは頷く。

「だから、みんな、悪いんだけど、ドリームもん借りていいいかな？」

ドリームの服の裾を引っ張るドリームもんは
「僕、物じゃないよ」と苦笑いしていた。

「なあ、ドリーム

ふいに、ジャイアンが口を開く。

「俺等にも手伝わしてくれ

「やうだよ、聞こいやつたからこは黙つてらねなによー。」

ジャイアンに賛同するよつてのび太もドリーハー口づに訴える。

静香もスネ夫も頷いている。

「でも、危ないし、君達は人間だから、もし何かあつたら……」

ドリーハー口づは困つたよつてしゃんわつと拒絶する。

「ねえ、ドリーハー口づさん。お願ひ。私達、協力したいの」

静香がドリーハー口づに詰め寄り、ドリーハー口づを見上げる。

ドリーハー口づは相変わらず困つたよつて拒絶する。

その様子を見て、スネ夫は何かを思つたのか、静香に耳打ちする。

スネ夫に何かを言われた静香はより一層ドライコフに詰め寄る。

「ねえ、お願ひ。絶対に迷惑はかけないから、お願ひします」

のび太とジャイアンは頭に?マークを浮かべたがドライもんは納得したように見ていた。

「…………わかった…………でも、言われた事は守つてね…………」

ついにドライコフが折れた。

「おー!スネ夫、どういう事だよ」

ジャイアンが不思議そうにスネ夫に聞く。

「前、雑誌に書いてあつたんだよ。『アーティストがつまらぬべ断れないタイプ』って」

「あ...」

思つたが極を上る。

「よしー！これで俺達も行けるな！なら、さあそく行くぜー！」

ジャイアンが楽しそうに叫うがドクターはそれを制した。

「今、行つても準備が出来てないから、危ないよ」

「ねえドクニーロフ、まだ本格的に始まつたワケじゃないんだよね？」

「よし、じゃあ今日は畠田のためじゃつづく体ごと準備しよう。」

「あ、ならみんな僕ん家に泊まつていけばいいよ。アーリーハ、君も泊まるでしょ？」

アーリーに次いでのび太も発言する。

みんなが特に反対するわけではないのだが、のび太の家で一夜を過ごし、明日の朝、出発する事にした。

第二話 一夜の夕飯（前書き）

捏造設定あり、気をつけてください。

第三話 一夜の夕飯

明日、他のドラえもんズのメンバー達を探しに行く事になったのび太達は現在、のび太の家で一夜を過ごす事になった。

場所は台所。台所に立っているのは静香とドーラー口づ。

二人で夕飯を作るようだ。

「ドーラー口づさんは、好きな食べ物なんですか？」

静香がエプロンをつけながら尋ねる。

「んと……、温かいスープ系が好き」

「じゃあ、クリームシチューにしまじょうか」

「でも、みんなの意見は？」

ドリーハツは上を見上げる。恐らく、みんなの意見を聞きたいのだ
ら。

「大丈夫よ、みんな何であつても食べててくれるから」

静香はせつしりと野菜を準備し始めた。

ドリーハツも、彼女に続き、調理を始める。

「でも、ビックリしたわ。ドリちゃんの知り合っここんな有名な人
がいるなんて」

ドリーハツがじゃがいもの皮を剥いている最中、静香は人参を切り
ながら喋る。

「…ドラえもんズは、知られてないけど、凄い特技を持った人の集まりだから」

こうして、静香との他愛もない会話を楽しみながら、夕飯作りは続けられた。

「みんなー、ご飯出来たわよー」

静香が階段の下から呼ぶ。その姿が母親のように見えて、ドーハーハフはクスリと笑つた。

食卓に全員が座ると、誰が企图するワケでもなくみんなで挨拶をし、食べ始める。

「あれ、ドーハーハフって左利きなんだ」

のび太がドーハーハフのスプーンを持つ手を指差す。

「なんでだろ、昔から、左が使いやすいんだ」

「そりなんだ」
「……」
「げ、人参」

自分のシチューに目をむけたのび太は嫌そうな顔をする。

シチューに入っているのはのび太の嫌いな人参。

「あ、ごめんなさい。小さく切るの忘れてたわ」

静香が

「残してもいいから」と謝る。しかし、ドリえもんは食べると言わんばかりに見ている。

のび太がどうしたらいいか悩んでいると

「人参、もらって、いい?」

デリーロフが助け船を出してくれた。

「え、食べてくれるの?」

「うそ」

「ダメだよ、デリーロフ。のび太くんを甘やかしちゃ

デリーロフもんはこれも成長のため、と皿の顔でデリーロフを見た。

「代わりに」

「？」

ゼリーハツの言葉に首を傾けるのが太

「サラダの、ゆで卵、食べて」

ゼリーハツが搾搾した先にあるのはゼリーハツの分のサラダ

見事にゆで卵だけ残っている

「ゆで卵、嫌いなのか？」

ジャイアンが聞くとゼリーハツは額を
「ボソボソしてて苦手」と呟つた

のび太は「一つ返事で了解し、デラーハのゆで卵を食べた。

「デラーハはお礼と言ひような感じでのび太の人参を食べる。

「デラーハ、昔からゆで卵だけは食べないよね」

「感触が、ヤだ」

デラーハもんとデラーハが畠を懐かしむように語り出す。

聞いていると畠やつだと思ったのか、4人は静かになる。

「もしかして、のび太くんの人参食べたのってキッドの事があったから？」

「『飯の時、いつも『食べててくれ』って言われたから

「ドラーハッてば、ゆで卵以外に嫌いな食べ物ないからみんなに食べてって言われたよね」

「うん、貝とか、オクラ、納豆、ピーマン、玉葱……人より食べた気がする」

「でも、ドラーハッてば中々太らないもんねー。女の子達羨ましがつてたね」

「僕は、筋肉があまりつかなくてヒョロッとしてたから嫌だつたけどね」

一人の会話を聞いていると、今ロボットが暴動を起こしているとは思えないくらい落ち着けた。

しばらくして、じかさつさまをした後に洗い物をして、明日に備えて寝る事になった。

いよいよ明日、他のドラえもんズのメンバーに会えると想つたのだが
太は中々寝付けなかつたそつた。

第四話　中国4000年究極のカンフーマスター王ドラ（前書き）

オリジナル設定ありの擬人化。

王ドラのキャラが壊れています。

第四話 中國4000年究極のカンフーマスター王ドラ

朝、のび太が目覚めた時にもうみんな起きていた。

ドリえもんとエリーゴンから言われた守りなきやいけない事は一つ

無茶はしない

危なくなったら誰かの後ろに隠れる

これだつた。

のび太達が了解すると、一人は納得し、タイムマシンに乗り込む。

のび太達もそれに続ぐ。

ドライモンがタイムマシンのスイッチを入れる。

「最初に、誰の場所に行く?」

ドライモンがドライマークに尋ねる。

「ここからなあ、すま、中国に向かおう

ドライモンは了解すると、タイムマシンを出発させる。

目指すは、仲間の一人がいる国、中国。

中国について、そこは地獄のようだった。

仲間がいるらしき竹林は焼け野原になり、動物の死骸もたくさんある。

恐りしく、暴動を起したロボットのやうだね。

「ひどい……」

静香が悲しそうに動物を見る。

「… ハーフセミダムヘー」

アリスもんは辺りを見渡す。

すると

「あひょーーー。」

遠くない場所で、声が聞こえた。

「王ドラだー！」

「王ドラー。」

「僕等の親友ー・ドラえもんズの仲間さー。」

首を傾げるスネ夫に簡潔に説明したドラえもんはドラ二コツと共に
声のした方に走つて行く。

4人も後を追つよつに走つて行く。

ドラえもん達がむかつた先にいたのは、ロボット相手に一人で立ち向かう人型ロボットだった。

橙色の膝までの長い髪を後ろで丁寧に三ツ編みにして、赤い中国帽に袖の長い赤い拳法着を着た小柄なロボット。瞳は翡翠色をしていて頭には豪華な花の簪をつけている。

一見すると女の子のような外観をしている。

そのロボットはヌンチャクと蹴り技を巧みに操りロボットを一体ずつ破壊していた。

するとドリーラーがそのロボットにむかって走って行く。

「ドリーラー！」

「ドリーラ」と言われたロボットはドリーラーを見ると驚いたような顔をする

「アーリークローラー。」

アーリークローラーの隣に立つ

「手伝ひよ」

その時、ロボットの丸い部品がアーリークローラーの視界につつった。

一瞬、場の空気が変わった気がした。

アーリークローラーの穢やかな皿付は吊り上がり、瞳の色も金色くとかわっている。

爪も長く、かたいものになつ、ニヤリと笑つた口元には尖つた歯が見えた。

「久々に暴れるぜえ、行くぜー!アーリーー!」

言葉使いも荒々しくなっている

「足、引っ張らないでくださいよ」

「誰が引っ張るかよ」

「一人の戦闘を、ただ見ているだけの4人はドーラー口づの変わつよう
に唖然となる。

「ドーラー口づは、丸いものを見ると人格が変わるんだ」

食器はセーフだけどね。とドーラえもんが言つ。

一方、戦闘中のドーラー口づは懐からタバコを取り出し、一ビン飲
み干す。

「すると、ドライコフは火を吹いた。」

「あ、ドライコフは辛いものを食べたら火を吹くんだ」

「　　「　　「　　「　　」　　」　　」

ロボットが全て焼け焦げ、戦いは無事に終わった。

「王アーラー・ドライコフー。」

ドライモンが一人の元に走る。ドライコフは元に戻ったのか、穏やかな顔つきに戻っている。

「ドライモン！　お久しぶりですね。…………後ろの方達は？」

王ドーラがのび太達を見る。

「僕、野比のび太。よろしく王ドーラ」

「私、源静香」

「僕、骨川スネ夫」

「俺、剛田武。ジャイアンて呼ばれてるぜ」

全員が自己紹介をし、のび太が王ドーラに手を差し出す。

王ドーラは少し戸惑つたが、のび太の手を取り、握手した。

「王ジドリと言います。ドラえもん、ドラーハツとは口ボット学校時代からの親友です。……あと、誤解される前に言いますが私は男です」

「…………男…………？」

王ジドリの発言に驚きを隠せない4人。

ドラえもんは爆笑、ドラーハツは苦笑いをしていた。

「な、何が可笑しいんですか！」

王ジドリは真っ赤になりドラえもんを睨む。尚、まだのび太と握手したままだ。

「だ、だつて…背がちがちやくて、声が高くて、女顔で、花の簪なんかしてたら誰だつて女の子だつて思つよ」

ドラえもんが笑っている中、のび太は王ドラの手を見てみた。

近くで見て見れば、白くて細い指。やや下を見れば、ゆつたりした白のズボン。そこから手と同様白くて細い足が見える。

この足で巨大なロボットを蹴り飛ばしていたと考えると背筋がゾクツとなつた。

「あの、いい加減手、離してもらえませんか？」

王ドラの言葉にハッとして、手を離すのび太

「ところで、ドラえもん。何故彼等を連れて来たんですか？もし、事件に連れて行くのでしたら、戦闘が出来ない彼等は危険ですよ」

王ドラは4人を見て、ドラえもんの方を見た。

「それ、俺達が足手まといつて言いたいのかよ」

ジャイアンがムツとしたように王ドラを見る。

王ドラの言い方が気にくわなかつたようだ

「私は正しい事を言つただけです。私達はロボットですが貴方達は人間です。ロボット相手には危険すぎます」

王ドラはハッキリと言い放つ。

のび太達は何も言い返せない。

ドラ二コフは、少し考え、4人に耳打ちした。

4人は顔を見合させ、ニヤリと笑うと王ドラを見た。

「な、なんですか？」

少し後退りする王ドラ

その瞬間、のび太、スネ夫、ジャイアンに取り押さえられた。

「な、何をするんですか！？」

状況がつかめない王ドラは3人の顔を見るだけ。

「ねえ王ドラさん、私達、迷惑にならないうさぎあるからお願ひー！」

静香が田の前で王ドーラにお願いする。

「……わ、わた、私… 女の子は苦手なんですか～…！」

王ドーラが顔を真っ赤にして叫ぶ。

4人は心中でガツッポーズ

ドーラー口づが教えたのは、王ドーラの弱点。

「あがり癖がある、そして女子に弱い」

それを4人が聞いて、この作戦を決行したのだ。

「ダメかしら？ 王ドーラさん」

静香がゾンビに近づいてくる。

「う…………ふふ…………あの…………それは…………」

「ハツリセミ」

「~~~~~!! わか、わかりました……お願いですから少し離れてください……」

王族アリが折れた。

エラエモんは

「なるほどそういう手があったのか」と納得してくる。

「やつたあーあいつがヒツジアリーパワー。」

「みんなの田が、本氣だつたから」

アーヴィングは、口をと笑つ。

「アーヴィング、アーヴィングが小さくな

ジャイアンの一言でアーヴィングがピクッとして反応する。

「あ、本当だ。僕より小さい」

それに気付かないスネ夫もジャイアンに相づけをつつ。

「INの身長だつたら小学生くらいだねー」

のび太もアーヴィングを見ながら笑つ。

「お人形みたいで可愛いわね」

静香も王ジラが小さい事を囁く。

「……………つふ…………」

王ジラから聞こえた声、4人は王ジラの顔を覗き込む。すると

「…つふええええええええええええ…身長が140cm代で何が悪いんですかああああ！…！」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

王ジラが泣き出した。しかも大声で。

「 王ジラは、小さい事をたくさん言わると大泣きするんだ 」

「 先に言つてよジラえもん… 」

「 わ、王ジラー悪かつた… 」

「 うう…ひっく…じりせ…私なんか…私、なんかあ…ふえええええええん… 」

「 言こ過ぎやつたんだって…。」めん王ジラー 」

「ハジマセバ、泣き止んで、お願ひだから。」

ハジマが泣き止んだのは30分後だった。

第五話 スペインの赤き情熱の怪力闘牛士エル・マタドーラ（前書き）

流血？あり注意

第五話 スペインの赤き情熱の怪力闘牛士エル・マタドーラ

やつとエドリラは泣き止み、次の場所へ行く事になった。

「うう…………ひぐっ…………」

「エドリラ」

まだ少し泣いているエドリラを連れ、タイムマシンに乗る。

「次、どこがいいかな？」

エドリラもんがエドリラヒドリーロフを見る。

「うーん……誰か
スペインです」

アーティストの言葉を遮つてドリフが行き先を指定する。

「あの寝起きの事です、ロボットにやられてるかもしませんか
いらいらまじゅう」

アーティストもんがタイムマシンを発進せん。

「よし、じゃあスペインに行こう……」

ふいに、のび太が王ドリフに話しかかる

「王ドリフ、優しいんだね」

「何故ですか？」

「だって、心配だからスペインに行くんでしょう？」

「……別に、そういうワケではありません」

一人の会話もそれなりに、むかうはスペイン

スペインに着くと、人はいなかつた。

「人がいないね…」

スネ夫が辺りを見渡す。

「恐いへ、ロボットの暴動によつ避難したのしみつ

王ジドリは周りを見ながら歩を出す。

ドワーフもん達も、王ジドリに続く。

その時だ

田の前を何かがものすごい速さで通りすぎた。

その

「何か」は家にあたり、地に倒れた。

よく見れば、人だ。

しかし、傷口から流れるのは血に似ているが、赤いオイル。

ロボットだった。

真紅の髪を後ろで一つに結い上げ、マタドールの衣装を着ている。

瞳の色は薄紫色で、左目の中には黒子がある。

右手にひらりマント、左手に闘牛用の剣を携えた男はドリエモンの仲間。

怪力を誇るマタドール、エル・マタドーラだ。

「マタドー...」

ドリエモンがマタドーラに駆け寄る。

「お、ドリエモン……それに、ドリエモンはドラか。久々だな」

傷を気にせずに笑顔で手を振る青年に王ジラの蹴りが入った。

「この馬鹿！－何怪我してるんですか！－怪力しか取り柄がないくせに！－！」

王ジラの一言に、マタドーラの額に青筋が立つ。

マタドーラはフЛАリと立ち上ると王ジラの頭を右手で驚掴みにして、顔を近づけ睨みつける。

「怪力だけが取り柄かどうかは、俺の戦いを見てから言えよ、おチビさん」

マタドーラはそれだけ言つと敵であるロボットの前に立つ。

しかし、右足を負傷している彼にはこわいが不利なのかもしない。

ロボットが右に動いたと同時にマタドーラは左へ動きロボットの腰に入りこむ。

ロボットが攻撃しようと左腕を振り上げるが、マタドーラが右手に持っているひらこマントで簡単にかわされる。

マタドーラは左手の剣を持ち直すとロボットの心臓部である場所：
…頭に剣を突き刺す。

ロボットの動きが止まる。

他数体のロボットも同様に止めに入る。

しかし

「なつ……？」

急所につまづかれなかつたのか、さつきのロボットが攻撃して來た。

マタドーラはとひてひらひと劍を離して、ロボットの右腕を掴む。

ロボットは右腕を動かそうとするが、それ以上の力が入つてゐるらしく中々動かない。

「パワー勝負は、俺の縄張りだー。おひあー。」

マタドーラが力いっぱいにロボットを持ち上げ、他のロボットこむかい、投げつけた。

その衝撃でロボット達は壊れ、動かなくなつた。

「…ふう、ビッグドライバー…。」

王アラの方にむかってベースをするマタドーラ。

「結局は、怪力頼みですか」

「うぬせー。やっぱスピード感あつたらー。」

「スピード感“だけ”はありましたね」

「なんだとー。」

ケンカが始まらしそうになる二人を慌ててドライバーロックが止める。

「… そういうや、こっちの人間さんは誰よ?」

マタドーラがのび太達を指差す。

「あ。僕、のび太。よろしくマタドーラ」

「僕、スネ夫」

「俺、ジャイアン」

「私、静香」

マタドーラは4人を見ると静香の前に行く。

そして片膝をつき、静香の手を取る。

「こんな素敵なおせうさんに会えるなんて、俺はなんて運がいいんだ。君に会えた事幸せに思つよ、セーラーリータ」

そう言つとマタドーラは静香の手の甲に口付ける。

二十一

のび太達はいきなりの事に思考回路が追いつかないみたいだ。

「一何馬鹿な事してるんですかああああああああ」

王ドラがマタドーラの頭上に踵落としを決め、盛大な音が響く。

静香本人は何がなんだかわかつていな

「静香さん、本当すいません…マタドーラはナンパで女の子が大好きなんです…何か不快だったりマタドーラは私がのしてしまつたので私が代わりに謝ります…！」

いや、まずはマタドーラに謝れよ。

と言ったかったがあまりの威力に誰も言えなかつたそくな。

「いえ、マタドーリーさんがそういう性格だとわかつたならいいんです。それより王アリさんがマタドーラさんに謝るべきなんじや…」

静香はやんわりとマタドーラに謝るよう促す。

「（さやかが静香ひやさん…）」「

「あ、せこ…。マタニー、起きてくださいわー」

エリナはマタニーを揺すぶる。

「こりて…なんだよ…」

「静香さんと言われたので謝ります。『みんなさー』

「へ?あ、ああ…」

こわなつの声に心惹かれてマタニー。

エリナは自分の四次元袖からお医者さんカバンを取り出しつつ、マタニーの手洗いを始める。

その間、エリナもんとエリーフは次の行き先を決めていた。

残す国はあと3つ。

第六話 古代アラビア砂漠伝説のタロット術士 ドラメシ・ニア世（前書き）

擬人化あり。ドリルちゃん出ます。

第六話 古代アラビア砂漠伝説のタロット術士 ドラメシードニア

王族ラガマタードーラの治療をしてくる間にドラえもんとドライバーは行き先を決めたようだ。

次の行き先は、サウジアラビア

「サウジアラビアには、どんな親友がいるの?」

スネ夫が興味津々でドラえもんに尋ねる。

「サウジアラビアにはドライバー三世って言う名前の親友がいるんだ。魔術士で優しいんだけど、怒ると怖い。僕らの保護者みたいな人なんだ」

ドラえもんが説明をすると、次はジャイアンが不思議そうドライバーに尋ねる。

「でも、ドラえもん達と年齢は一緒になんだよな？」

「やうじやないんだ。僕らは色、仕事、性格を考慮して年齢や外観を作られたんだ。ドラえもんは16歳で王ドラは15歳、僕が19歳でマタドーラが20歳つてなってるんだ」

「年齢はバラバラなんだね」

のび太が納得したように呟く。

「アリメッシュは22歳。ドラえもんズの中では最年長なんだ」

「アリエもんが付け足すよつて言ひついで」アリラが不満そうに口元をほそむ。

「なぜ、私は15なんでしょう。マタドーラよつね年上がよかつたです」

「多分、女の子が苦手な動作から幼くしたんじゃないかな？」

マタドーラが諭すよひてマタドーラを見る。

マタドーラは納得がいかないのか、ムッとした頬をふくらませる。

マタドーラ

「仕方ないよ」とマタドーラの頭を撫でる。

マタドーラも便乗に頭を撫でようとするが腕をほじかれる。

さうやら、頭を撫でるのを許している人物は限定されているようだ。

「そろそろ行きたいけど…マタドーラ、大丈夫？」

「えもんが心配そうにマタドーラを見る。」

「ああ、もう平気だぜ」

「マタドーラがニシと笑うと、えもんは安心したのか、タイムマシンの運転席に乗る。」

「よし、それじゃあサウジアラビアに行こう。」

のび太が元気よく腕を振り上げる。

「元気だな、のび太は」

隣にいたマタドーラが

「若いつていねえ」みたいな顔でのび太を見る。

全員を乗せたタイムマシンは多少狭かったが、なんとか乗り込み、出発した。

むかうは砂漠の国、サウジアラビア

サウジアラビアについて一番最初に見たものは一面の砂漠だった

「ハル、本当に誰かいるの？」

のび太があたりを見渡す。ビルを見ても砂ばかりだ。

「歩いていけば分かるよ。行こう」

ドリえもんの言葉を合図に全員が歩き出す。

「なあ、ドリスもさ。ドライミッシュドリスのかロボットありこなーせー。」

マタドーラが服につく砂を払いながら言へ。

「わかりませんよ。もしかしたら砂の中隠れてる可能性だつてありますからね」

「ドリラがそう言つた瞬間、砂からたくさんのロボットが現れ、ドリラもん達を囲んだ。

「ドリラの言つた事、当たつたな」

マタドーラはロボットを見ながら言つ。

「のび太くん達を守るんだー！」

「うえもんの言葉を合図に4人がのび太達を守るよ」立つ。

「ちひ、行く先々で飽きねえ奴等だな」

丸いものを見たのか、もう一人のドーラニコフになつていて、攻撃体制にはいる。

「早く倒してドーラメッシュの元へ行きましょう」

王ドーラもヌンチャクを構える。

ドラえもんもショックガンを、マタドーラはひらマントと闘牛の剣を構える。

その時、風邪を切るような音がしたかと思つとロボットの頭にタロットカードが刺さっている。

「あのタロットカード……」

ドラえもん達にほ」のタロットカードに見覚えがある。

「みんな、久しぶりであーるな」

絨毯に乗つて現れたのは桃色の長髪を風になびかせた男。紫の瞳を
し、縁の袖の長い上着を着ている。

頭には羽の髪飾りをつけたその男はドラメッド三世。

「さて、ゆづくつ話したいといひであるが……邪魔な物があるので
あるな」

絨毯から降りたドラメッドはロボット達を見る。

ロボット達は一斉にドラメッドに襲いかかる。

「ドーラメッシューー。」

ドーラえもんが大声を出してドーラメッシュの元に走り出すが、ドーラメッシュはそれを制した。

「ドーラえもん、大丈夫である。」の程度、我輩一人で充分である

そつまつとドーラメッシュはタロットカードを取り出す。

ロボット達がドーラメッシュに攻撃をしようとした瞬間

ロボット達は何故か動きを止める。

そして派手な音を立て、倒れた。

何が起きたのかわからないみんなにドラメッドが笑いかける。

「ドリームもん達はわかつてゐはずである。我輩が今何をしたのか」

「一タロットカードを正確にロボットの心臓部に投げたのですね」

王ドラガハツとしたように囁く。

「いや、待て。どんだけタロットカード強いんだよ」

我にかえつたマタドーラがドラメッドに質問する。

「我輩のタロットカードは戦闘用に作った特別製である」

ドラメッドはそれ以上何も言わなかつた。

「あ、デラメッシュ。ここにいる人達は、「知つておる。デラえもんが世話をしているのび太くんとその友人である」

デラメッシュにはなんでもお見通しだった。

「すうじねデラメッシュ、なんでもわかるんだ」

のび太が田を輝かせてデラメッシュを見る。デラメッシュは苦笑しながら答える。

「こや、デラえもんがよく話していたのを思に出しどな

「デラメッシュも世話役だから、相談しやすいんだよね」

ヒヂリエもんは言つてゐる。

「さて、残すはアメリカとブラジルですね」

王ドリラがメンバーを見ながら国名を書く。

「キッドと、ドリュー・ミだね」

ドリーハマフラーを直しながら返事をする。

「でも、タイムマシンこれだけ乗れるかなあ？」

スネ夫が心配そうに全員の顔を見る。

「あ、その件に関しては大丈夫だよ」

ドラえもんが「口」と笑う。

するとタイムホールが開き、そこから女の子が現れた。

金髪のサラサラセミロングに黒目。頭には大きなリボン。ドラえもんと色違いの黄色のパーカーを着て、真っ赤なミニスカをはいている。

ドラえもんの妹、ドラ二だ。

「静香ちゃん」とスネ夫くんと王ドラヒヅチハーフヒヅチラメシドサドハミのタイムマシンに乗つてね」

「何故このメンバーなんですか？」

王ドラが不思議そうにドラえもんを見る。

「僕らとのび太くん達とドリームをいれたら一人になるでしょ？」
「方があとドリームかキッドのどちらかが乗ればいいしね」

納得、と言つたようにドリームが頷く。

しかし

「ま、待つてください……私が乗る方には静香さんが……」

「あ、ドリームもんつてば、私とアリサさん以外の女人ダメだった
のよね」

ドリームが困ったようになりアリサを見る。

「アリスもん、アリサもんってへ…」

のび太がドリえもんに耳打ちする。

「王ドリのガールフレンド」

ドリえもんが答えるとピックリしたように王ドリを見る。

女の子が苦手な王ドリに彼女がいるとは思わなかつたのだろ？。

そして、どうにか王ドリを説得し、タイムマシンに乗る。

——何あるから、アメリカとブラジルに同時にいく事になつた。

ドリえもん達はアメリカへ

ドリーラ達はブラジルへとむかう事になった。

果たして、一人は無事なのだろうか

第七話 ブラジルの若きスーパーエースストライカー ドラワーニョ（前書き）

前の話より少し短いです。

第七話 ブラジルの若きスーパーエースストライカー ドラワーー三

ドリフリ達は現在、ブラジルにむかっている。

ドラワーー三を連れて来るためだ。

しばらくして、ブラジルについた一回はドラワーー三を探すべく歩き出す。

「探すと言つても、特徴がわからないんじや……」

スネ夫が困ったようにドリフリ元気いっぱい。

「そうねえ……。髪のい 「わ～！……どこでどこで～～～」

ドリフリが特徴を伝えよつとした瞬間、どこからか間の抜けたような高い声が聞こえて来た。

声のした方を見てみれば、そこには一人の少年が。

黄緑色の髪を後ろでサッカーボールのボンボンで結び、緑色の大きな瞳をし、サッカーのユニフォームを身に纏う少年だった。

「あ、あの人よ。ドラリーーは

ドラミが呑気に指差す。

「危なくないの！？」

静香が不安そうにドラミをみやる。

「大丈夫よ」

ドリーニは心配そうな顔すらせず、ドリーニを見る。

ドリーニョはひたすら走り続けている。後ろには自分を狙つたくさんのロボットが。

そして目の前には親友と、親友の妹、そして見知らぬ人が一人。

ドリーニョはあまり考えるのが苦手なために直感で行動する。

ふいに目の前に見えたのは誰かが落としたサッカーボール。

「あれだあーー！」

何かを閃いたのかドリーニョはサッカーボールにむかって走り出す。

「アリバランチーの……」

サッカーボールを蹴り上げ、自分も高くジャンプする。

「……………」

空中でそのまま一回転し、サッカーボールを蹴る。

「ハーパー」

サッカー ボールはそのままロボット達にあたり、その衝撃でロボット達は建物にぶつかり、ショートした。

「ゴールだ、ゴールだあーーやつたあ！」

ハシャいでいるドラワー＝ヨの元に、六人が駆け寄る。

「ドラリー＝ヨー。」

ドラメッドがドラリー＝ヨを呼ぶ。

それに気付いたドラリー＝ヨは笑顔でドラメッドに手をふる。

「あ、ドラメッド。やつほー」

「ドラリー＝ヨ、大丈夫ですか？」

王ドラもドラメッドに次いでドラリー＝ヨに話しかける。

「大丈夫だよ。…あれ？その人達誰ー？」

「ドリーネ」が静香とスネ夫を指差す。

「スネ夫さんと、静香さんよ。忘れちゃダメだからね」

「ドリーネ」が念押しして一人を紹介する。

「うん、忘れないように頑張るー」

「ドリーネ」は、物忘れが激しいんだ」

「ドリーネ」がスネ夫と静香に耳打ちした。

「なんかさ、みんな弱点つてあるみたいだね」

スネ夫が関心したように王ドリフ達を見る。

「まあ、確かに私は女の方が苦手で、ドラメッシュは水が苦手、ドリフ
ー口つは寒いのが苦手、ドライバーもせ覚えるのが苦手ですからね」

王ドリフが苦笑しながら囁く。

「セヒ、次は22世紀むかづわよ。お兄ちゃん達の所に行かなき
や」

王ドリフがタイムホールの入り口まで歩きだす。

しかし

「やべりんー危ないーー！」

まだ動けたらしくロボットがドラニを捕まえようとする。

「ルサルカ」

「アーティスト」

ドライコフがヒヤヒヤを突き飛ばし、ドリハは捕まりなかつた。

だが、代わりにドライコフが捕まってしまった。

גַּתְּרָהָןִים (אֶלְעָזָר) --- גַּתְּרָהָןִים

ロボットはドライバーを捕まえた左腕に力を込めて行く。

「うへ……へへへ……せあ……ねじ……」

ギシギシと嫌な音がする。

「のままでせりへ口つが壊れてしまへ。」

「ゼリメシド、ゼリコーイ、スネ夫さんと静香さんをお願いしま
す」

エリザムンチャクを構え、ロボットの前に立つ。

ロボットはアーリーハーフを離し、エリザムンの方をむく。

「仲間を傷つける者は……私が許しません。まあ、始めましょう」

「エリザムン……」

その場に座り、「んでもこるドーラ！」王ドーラは笑顔をおく。

「大丈夫です。それより、ドーラ二口つをお願いします」

笑顔をむけた後、王ドーラは再び厳しい顔つきでロボットを見た。

第八話 氷の大地ロシアをすうりいの狼男 ドラゴフ（前書き）

暗め

グロテスク表現、とまではいかないよつた表現があるので注意。

第八話 氷の大地ロシアを駆けめぐる狼男 ドラゴン

ロボットと対峙する王ドラ。

周りには緊迫した空気が流れる。

先に動いたのは王ドラ。

ヌンチャクをふりかざし、ロボットの左腕を攻撃する。

しかし、軽くヒビが入った程度で致命傷にはならない。

次に動いたのはロボット。

王ドラを捕まえようと両腕で攻撃していく。

セイジは小柄で身軽な王ジラ。

軽やかにかわしていく。

どちらも互角の勝負がしばらくの間続いた。

その時、ロボットがある行動に出た。

なんと、静香達の方にむかい腕を伸ばしたのだ。

王ジラは触れられまいと静香達の前へ飛び込み、腕を封じた。

しかし、ロボットは片方の腕で王ジラの足を掴む。

そのまま宙吊り状態にされる王ジラ。

「へへ……」

「王ドラー！」

ドラメッドがタロットカードを、ドーリー＝ヨガサッカーボールを構える。

しかし、ロボットは王ドラの左足を掴んでいる腕に力を込める。

しばらくじて

バキッ

いやな音がした。

響く王女の絶叫。

折られたのだ

左足を。

アヒルの悲鳴も響く。

ロボットは興味がなさげに王グラを放り投げよつとした。

しかし、王グラの足を掴んでいた腕はなかつた。

後ろを振り向けば、王グラを抱き抱えたドクーハの姿があつた。

ロボットの腕は地に落ちていた。

ドクーハはひつむこっていた。

王グラは、あまつの中の激痛により氣を失っていた。

折られた左足は力なくダランとしていて、少し変に折れ曲がっている。

ドクーハはやつとドクーハの傍で王グラを寝かせる。

その日は、もう一人のドライバー

「…頼む」

それだけ言つとロボットの傍まで歩いて行く。

「まさか、お前みたいな雑魚に腹が立つとは思わなかつたぜ。…まあ
もつ一人の俺でも腹が立つてゐるだらうよ」

ドライバーは、まだ残つてゐるロボットの腕を掴む。

「テメエ…よくも王ドラの足、折つてくれたな。この罪、かなり重
いぜ。だから……テメエをバラバラにしてやらあ……」

その言葉と共にロボットの腕を無理矢理引き切るドライバー

そのまま頭上に乗り、右手を構える。

別人格になつたドラー・コフの爪は鋭くかたい。

厚さ数十cmの鉄板も簡単に貫くほどだ。

「俺の親友の足を傷つけた代金だ。しつかり払えよおーーー！」

ドラー・コフはロボットの頭上に右手を突っ込み、そのまま手でメインコンピューターを破壊した。

ロボットはそれきり動かなくなる。

「つたぐ……意外に固い奴だったぜ」

「アーティスト」

ドラマチック達が慌てて王室の方へむかう。

「ハドヲさん…しおかりして！」

「死んだら嫌だよー。王ドラーーー！」

静香とスネ夫が必死に呼びかけるが王ドラは反応しない。

「…まあはなはだ結構であります。」

「アーティストとして少し考え、22世紀へむかう提案をした。」

他に意見もなく、6人はタイムマシンに乗り、22世紀へむかつた。

タイムマシンの中での、少しでも痛みを和らげるために静香が応急処置をしていた。

スネ夫とドクターは心配せずに王ドラを見る。

運転しているドクターの手は震えていた。

ドクターメッシュは、ドクターを見た。

ドクターはまだ別人格の方だった。

「変わらないんであるか？」

「今変わったんだから。…あいつ、自分のせいだって抱え込んでる。」
「この事が長く続きやつだ？だから、あいつの変わりに俺がずっと出てこいやるんだ」

アラニコフは悲しげな顔で自分の服の裾を握る。

「…………辛いであるよ」

「…辛い思いをするのは、俺だけでいい。あいつはあじあわせたくはない」

それ以上、会話はなかった。

指す先は未来の故郷

第九話 ミスター・アメリカンドリーム 正義の熱血ガンマン ドラ・ザ・キッド

アメリカへ行つたドラえもん達。 キッドは果たして無事だらうか。

第九話 // スター・アメリカンドリーム正義の熱血ガンマン ドラ・ザ・キッド

ドラえもん達を乗せたタイムマシンは、開拓時代のアメリカへとむかっていた。

開拓時代のアメリカは、人一人すらいない程寂れていた。

恐らく、この街でシェリフを務めるドラ・ザ・キッドが皆を避難させたのだろう。

「ドーラーさん、キッドってどんな人なの？」

のび太が、ドラえもんに尋ねる。

ドラえもんは振り向き、少し間をおいてから話す。

「ん~とね、ガサツで短気だけど明るくてちょっとお調子者かな?」

「アリババの彼女、あとアリババ

「アリスちゃんのかわい...? もしかしてラブもん、交際認めてないか
アリスちゃんをもう見なかつたんじゃ...」

ジャイアンが恐る恐るドラえもんを見る。

「違うよー。キッドはドラミの事大に思つてくれてるから認めない
なんて事はないよ！でも、キッドのいる場所は危ない街だからプラ
ジルに行つてもうつたんだよ！」

確かに、キッドのいる街は、いつ流れ弾で死んでもおかしくない街だ。それを考えて、ブラジルに行かせたのは賢明だろう。

「しかし、どうえもん。キッス、ドリーリーにいらないみたいだぜ」

マタドーラがあたりを見渡す。

あたりには人の気配がしない。

「街の奥の方から何か音がするよ。行ってみよう」

ドラえもんの言葉を合図に街の奥へと進む。

するとそこには

「ドカーンー！ドカーンー！……くそ、キリがねえ」

ロボット相手に一人で戦う男がいた。

金髪の髪に青い瞳、黒のウエスタンハット。白のTシャツの上には星条旗を模したベスト。青のジーンズにブーツといったウエスタンルックの青年は、左腕に空氣大砲をつけ、ロボットに攻撃している。

彼じやが、ドラ・ザ・キッドだ。

「苦戦じてゐな、キッドのやつ。」

マタドーラがロボットの数を見ながら呟く。

「...ードラえもんー・ショックガン貸してー。」

何かを考えたのか、のび太はドラえもんからショックガンを借りる。

のび太はショックガンを使い、次々とロボット達の急所、頭を撃つ
ていった。

突然の誰かからの助太刀に戸惑つキッド。

ロボットが全て動かなくなるのを見ると、ドラえもん達はキッドに

近寄る。

「キッド！大丈夫？」

「ドラえもん！ああ、大丈夫だぜ」

ドラえもんの質問に笑顔で答えるキッド。

「キッド、のび太に感謝しろよ。助太刀したのこいつだからな」

マタドーラがのび太を指差す。

「お前だつたのか！サンキュー」

「ううん、役に立つてよかつたよ」

キッドから感謝の言葉をもらい、少し照れるのび太。

「他の奴等は？」

キッドがキヨロキヨロと周りを見る。

「大丈夫だよ、他のみんなはブラジルに行ってドラリーーイヨを呼びにいってるから」

「そつか、なら安心だな」

キッドは安心したように空氣大砲を四次元ハットに戻す。

その時だ

「ドリフえもん、キッド。親友テレカが」

マタドーラが自分の親友テレカを出す。

親友テレカは、光っていた。

「どうしたんだ、いつたい…」

『みんな、大変であーる…』

どうやら、連絡のようだ。

ドラメジドの声が聞こえる。

しかし、こつものんびりとした声ではなくどこか切羽詰まつていてた。

何事かと思い、眞静かになる。

次の一句で、全員に衝撃がはしる。

『王族の妃が、ロボットによつて折られたである……』

第十話 病院には知り合いが（前書き）

オリジナル設定、キャラあり。

今回はマタドーラの彼女が出ます。

第十話 病院には知り合いが

「…………王ザラの足が折られたあ…………？」

「そうである！今我輩達は!!!!!!十殿が働いている病院にいるのである！すぐに来てほしいのである！」

連絡が終わり、親友テレカをしまつ3人。

「…………王ザラが心配だ！」

ドアの外もとの言葉を口に、みんなタイムマシンに乗り込む。

行き先は、!!!!!!の働いている22世紀の病院

一方、22世紀のある研究所では

「心配…か…フン、ぐだらない」

黒髪ショートヘアの田付きの悪い少年が、ドクターや看護師達の様子を監視していた。

「ま、一人はもう僕の手の中にいる…。せいぜい騙されるんだね」

意味深な言葉を残し、少年はモニターを後にした。

22世紀についたドクターや看護師達は急いで病院に来た。

中に入ると、ドクターや看護師達がいた。

「...アリバード」

「キッシュ...無事だったのね」

キッシュの姿に安心したのか、キッシュ抱き合へリバード。

「お前も無事でよかったです。…………王アリバード...？」

キッシュが尋ねると、アリバードは辛うじて顔つきになると。

「今は...眠つてゐる。...足のスペアが見つかるまで時間がかかるみたいなの...」

言葉を発するアリバードの体は震えていた。キッシュは優しく背中を撫でてやる。

「大丈夫だろ、王道うなう。……ソリソリこの、お前等と!!!!!!トだけか？」

病院の中は、とても静かで誰もいないと思つ程だ。

「うん、ソリソリヤー！ トさんやモモさん…他に何人かいるわ」

「ソリソリヤー！ トさんにモモちゃん…か。あとは、みんなのガールフレンドかな」

ソリソリもんがソリソリとソリソリは首を縦に振つた。

ソリソリの案内でもすは王道うのこる場所へとむかう。

「アタシー！ ……」

ふいに、マタドーラの名を呼ぶ声。

後ろを見ると一人の少女が立っていた。

茶色の髪にウエーブをかけ、後ろでひとまとめにしたオシャレな髪型。やや大人びた顔つきに白のYシャツ、ミニスカをはいてヒールのサンダルを履いている少女。

腰に巻いているベルトにはハサミやブラシ、ピンが入ったポーチがついている。

マタドーラのガールフレンドで美容師のリンスだ。

「おまつ…リンスか。なんでここに?」

「中心街の方じゃ危ないのよ。私の店、街の真ん中だし。だから、//トに呼ばれて此処に来たのよ」

リンスが驚くマタドーラに説明する。

「なるほどな……怪我、してないか？」

マタドーラがリンスの手をとる。

いくら女好きなマタドーラでもガールフレンドにほやはり普通の女の子と接し方が違う。

「しないわ。……アンタは？」

「俺?足をひょいとばかし

軽く笑いながら、怪我した場所を見せる。

「普段寝しているから、アヒルみたいなのよ

「アーラーもん、なんかロインスをマタドーラに冷たいね」

のび太がドラえもんにさつと耳打ちする。

「マタドーラはそれを聞いていたのかこちりに向き直る。

「お前等わかつてねえなあ。ロインスはアレだ、シンチレ属性なんだよ。普段は嫌味やら罵倒やらがめむやくひやうじなど、一人きりでこらとおはそれはもう……」

そのままここにかけて、マタドーラはロインスに蹴られた。

しかも、怪我した部分を。

悶絶するマタドーラを尻目に、リンスはドラえもん達の方をむき

「こんなシェースタばかりやるぐーたら怪力バカですがよろしく頼みます」

と、マタドーラの襟首をつかんでキックで渡した。

「おつよー・マタドーラは意外に頼りになるからなー。」

「意外に、ね」

リンスはそれだけ言つと踵を返して別の場所に行つた。

「コンスの奴…そんなに恥ずかしいのか。可愛い奴だな」

「お前の言動のが恥ずかしいよ」

復活したマタドーリにキッズの最もなツツコウがはーる。

「 セウ、 ハニアの部屋へ」

里約を思つて出しつゝ、再び部屋へ向かう。

「 デリーパー…ハニアの部屋か?」

ハニアの部屋の前へつづいて、デリーパーがいた。

ジャイアンがドクターロボに尋ねる。

「ああ、この中だ」

早く行ってやれと言われ、中に入る。

中に入ると黒髪を二つに結い、ナース服を着た少女 //子がいた。

「//子さん、王ドラの様子は…？」

次の瞬間、//ドクの口から信じられない言葉が

「王ドリさんの足のスペア……一場が襲われて、作れないみたいなんですね」

第十一話 いざ、工場へ（前書き）

ドリーハツのもう一つの人格には名前が…

そして工場へいくのはあの三人！

第十ー話 これ、工場へ

「作れないと……」

絶望的な言葉。

作れないなら、王族の足は自分で治らない。

しかし、アリスも人々には王族が必要だ。

どうしたらいかと考える一回。

少しそこ、王族がハッとしたよつて口を開く。

「やうだ！ 確かその工場には部品だけならいいやんあります。足の部位の部品もあるはずなんです。それさえあれば、王族さんの足は治せますー。」

「でも、それは組み立てなきゃダメなんじゃないのか？」

マタドーラが尋ねる。///子は首を横に振り、続けた。

「私を讃めないでください。部品さえあれば、絶対に治して見せます」

「じゃあ、問題は誰が行くか……」「俺が行く

ふいに、ドリアンの言葉を遮る者がいた。

ドリアンだ。

「その工場から取つてくつやいいんだろ。俺が行く

ドライコフはナマナマに再度確認を取り、扉に手をかける。

「ま、待って！一人じゃ危ないよ。ドライコフ、「月夜だ」

のび太の言葉を遮るドライコフ。その口からは謎の名が。

「ザッ… や… ?」

「月夜はドライコフが俺につけた名だ。あいつ、俺は自分とは違う人だからって名前をつけたんだ」

「じ、じゃあ月夜さん。一人じゃ危ないよ」

のび太はドライコフ、もとい月夜の服の裾を引っ張る。

「だが、誰かが行かないと王ドラの足は治らないだろ。俺は一人でも平…「待つて!!」

突然、扉が開きドラリー＝ヨが入って来た。

「僕も行く！王ドラの足、治してあげたいもん！ね、ダメ？ドラ＝コフ……。あ、違った。月夜だね」

月夜のマフラーを引っ張り、上目使いで見上げるドラリー＝ヨ。

もう一人の彼、ドラ＝コフもそつだが月夜は上目使いに弱い。

「…はあ、わかったよ。行くぞ、ドラリー＝ヨ」

「うん…」

「ドーリーー！」と月夜が病室を出でていくのを、のび太はただボンヤリと見ていた。

そののび太を見ていたキッドは、ふいに四次元ハットに手をかける。

「のび太」

キッドはあるものを、のび太に渡す。

のび太が渡されたのはショックガン。

「キッド…」

「一人をほつとけねえんだる。行つてこい」

「…………うん、ありがとう。」

のび太はキッドに礼を言つと病室を出でていった。

「二人共!待つて!」

病院の外に出たばかりの一人を呼び止める。

「はあはあ……僕も行く。……一人の足、引っ張っちゃうかも知れないけど……やつぱり、見てるだけじゃ嫌だから……」

ドリリー＝ヨは月夜の顔を見る。

連れて行くのかどうするのかが気になるらしい。

「覚悟、出来てるんだな」

「……うん…」

月夜はそれだけ言つとのび太の頭に手をあぐ。

「危なくなつたら、俺がドリマーの後に隠れる。俺等からは離れるな。もし守りきれなかつたらドリームくんが後からいふさいだらな…」

月夜は、ドリームくんに対する恐怖を思い出しながらも無事了解してくれた。

ドリマーは、心なしか嬉しそうだった。

「じゃあ、一緒に行こうね……エーッ……」

「のび太だよ」

「うふ、のび太くん！ 行こう！ ……」

ドリュー博士に手をひかれながら、歩き出すのび太

月夜は苦笑しながら後を追つ。

目指すは、ロボット修理工場

第十一話 裏切りのガールフレンド（前書き）

工場に来たのが太、ドラリー一郎、もう一人のドラー・コフ 月夜。
しかし、そこにいた敵は、ある親友の彼女であった。

第十一話 裏切りのガールフレンド

のび太と月夜、ドラリー＝ミはとある工場の前に立っていた。

「…月夜は王ドラの足のパートを取りに来たのだ。

「中にもまだロボットがいるかも知れねえから気をつけろよ。…特に
ドラリー＝ミ」

月夜はドラリー＝ミの方を見るがドラリー＝ミはすでに中にむかって走っていた。

「…月夜…。ドラリー＝ミが先に……」

「追えー追うんだー！ アイツを野放しにしてたら確実に厄介な事に
！…！」

そう言つて慌てて走つて行く月夜。

のび太もそれに続いた。

「あれー？ 一人はどこだろ」

ドーラリー＝ヨはもう工場内で迷っていた。

「あれ？ 僕何しに来たっけ？」

そして目的すら忘れていた。

「ん~と……。あ、いいや!…」

忘れてしまった事をあまり深く考えないドラマー一也はサッカーボールを取り出しサッカーのドリブルを始めてしまった。

そんな彼を遠くから見ている者がいた。

「ドラマー一也…」

もつとドラマー一也を見つけた用夜とのび太。

「あ、二人共。何してるの?」

「それは、じつちのセリフだよ。いきなりいなくなるんだもん」

のび太が肩で息をしながら言つ。かなり走つたのだろう。

「足のパートはこの先にあるはずだ。せつせつ…
「その必要はないですよ」

突如聞こえた少女らしき高い声。

振り向けば一人の少女が立っていた。

濃い緑色のショートヘアに大きな丸眼鏡。フリルやリボンをあしらつた可愛らしい服を着た少女だった。

頭には音譜を模した髪止めをしている。

「あー、シキちゃん！」

「ドーリコーーー！」ミヤが少女…シキを指差して言ひ。

「シキ…ちゃん？」

「…ドーリメッシュのガールフレンドの指揮者ロボットだ」

月夜がシキを見ながらのび太に説明する。

「お久しぶりですねえ ドーリコーーー！」
…………… 月夜くん

無邪気な笑顔で歩み寄つてくるシキ。しかし

「来るな」

月夜は一言言つて鋭い爪をシキにむける。

「月夜？」

のび太が驚いたように月夜を見る。

「ど、どうしたんです…

「なんですかここ？」

シキを睨みつけたまま言葉を遮る月夜。

「…………あ、ここ危ない口ボソトがいるんだよねーでもシキちゃん、なんでここのの？」

ドリマーが思ひ出したよひシキに尋ねる。シキはつむじたまま何も言わない。

「こんな危険な場所に戦えないロボット…しかも女が来れるワケがない。…何が目的だ?それに、探しに行く必要がないとはどういう事だ」

月夜はシキに未だ爪をむけている。

する

いきなりシキが笑い出した。

「な、何が可笑しいの！？」

のび太の言葉にシキは先程とはうつて変わった表情をする。

それは、光を宿さない濁つた瞳に、歪んだ笑みだ。

「貴方達。たつた三人で来るとはあるかですねえ……。必要がないと言つたのはここが貴方達の墓場になるからでーす」

いつもと同じ、能天気な口調と共に現れたは何十体ものたくさんの戦争ロボット達。

「足のパーツを持っていかれて、王ドラくんの足が治るのは厄介ですから……」

今ここで死んでくださいね

』

第十二話 発掘ひ争い（前書き）

襲いかかるロボット達。闘(ハグ)ワニーラーー!! 夜。そんな中、のび太はある物を発見する…。

第十二話 発掘と争い

「今ここで死んでくださいね」

その命運と共にロボットがのび太達に襲いかかる。

ドリュー＝三は咄嗟にのび太の手をひいて走り出す。

月夜は爪、蹴りを使いロボットをなぎ倒して行く。

「ドリュー＝三、月夜が危ないよ……。」

のび太は月夜の方を見て言つ。

ドリュー＝三はのび太のある部屋に入れる。

「ここで待つてて……！」

「アーヴィー、君はそれだけ言つて戻を閉めた。

のび太は部屋の中を見渡す。

中は部品の倉庫らしい。

「……王ドラの足のパートがあるかも知れない。」

そう思ったのび太は倉庫の中を探し始めた。

「へんつ… キリがねえな…」

一方こちらは月夜のいる場所。

何体もロボットがいるせいか、月夜は疲れ始めている。

「フフ、どうしたんですかあ～？」

その様子を楽しそうに見ていくシキ。

その時

「シユ~~~~~ト~~~~~！」

サッカー ボールがシキの頬をかすめる。

「…………なんですか」

シキは冷たい目でサッカーボールを蹴った本人
を見る。
ヨーロッパのドリーライ

「相は、シキちゃんじやない……シキちゃんはこつもデラメッシュの傍にいて、二二二二してて、優しくて……そんなシキちゃんはシキちゃんじやない……」

ドリーネは、足りない頭で精一杯言葉をつむいだ。

「…残念ですが、私は私は。ドーラリーー！『くん、貴方も死んでもらいますよ』

シキの合図で再びロボット達が襲いかかる。

「負けないもん！！」

「そう簡単にやられてたまるかーー！」

一方のび太は倉庫をまだ探していた。

「見つからないなあ……」

以前、ドラえもんのようなロボットの体のパーツの名称を教えてもらっていたため、のび太はどんなものかはわかっている。

しかし、中々見つからない。

あきらめかけたその時だった。

埋もれていた中に、一つの箱を見つけた。

その箱に書かれていた文字は

“元猫型ロボット 現人型ロボット専用部品 足”

のび太の探しているものだつた。

「これなら…王ジラの足が治る…」

のび太は嬉しそうに箱を抱え、部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1925d/>

孤独な少年VSドラえもんズ

2010年10月15日18時47分発行